



美しき熱帯魚

透明な海 ルックス勝負

どこの水族館でも飼われているのが、南の海の熱帯魚である。熱帯魚といえば沖縄を思う人も多いだろうが、業者に発注すると宅配便で届けられ、水槽に入れても美しく見栄えが良いので、少し嫌な言い方だが水族館では便利な魚である。チョウチョウウオやクマノミなど、知られた魚も多い。それに比べて、北の方から連れてこられた魚は美しくない。須磨海浜水族園には北海道から連れてきたオオカミウオやクロソイがいるが、まあ、美しくない。なぜ、南の海の魚たちは、ああも色あでやかなのだろうか？



美しいのは、やはり、相手の視線を意識するからである。女性は皆美しく着飾るが、それは見られることを意識しているからである。熱帯魚も見られることを意識していると思われる。つまり、情報のやりとりを視覚で行っているのである。どうやら、美しさのポイントは視覚のようである。しかし、情報のやりとりの手段は動物によって違う。視覚の届きにくい海にすむイルカは音、すなわち聴覚を使うだろうし、野生のオオカミは臭い、つまり嗅覚を使うであろう。確かに、人間も聴覚、嗅覚を利用するが、視覚の情報量は多いし、重要である。

例えば、人間の女性に「お小遣いをあげるから、おしゃれをしなさい」などとオジン臭いことをいったでしょう。人間の女性は、まず服やアクセサリーに金をかけるであろう。香水屋に走る女性はあまりいない。ところが、オオカミやイヌの女性に同じことを伝えると、彼女たちはまず香水を買い求めると予想できる。イルカなら、さしずめ、うがい薬でも買うのだろう。このように動物は最も重要視する情報の伝達手段が違う。私が「あの女性、いい匂いだね」などとのたまうものならば、変態ととらえられ社会から放逐されることであろう。

熱帯の海中。透明度が高く、光も差し込むので、魚の色や形もよく分かる。たくさんいる魚は、コギリダイモルディブで筆者撮影

視覚で情報を交換するには、視覚が利くような環境が必要である。澄んだ空気、澄んだ水、そのような環境において生物は視覚を使うようになる。陸上の場合、その空気は大抵透明であり、ものがよく見える。ところが、水中の場合は難しい。濁っていることも多い。濁りの原因は植物プランクトンのことが多い。泥の濁りは、いずれ沈殿して澄んでくるが、植物プランクトンの濁りはそうはいかない。栄養がある限り、植物プランクトンは増殖し、濁りはつづく。そう、栄養の豊富な海は濁るのである。

沖縄など熱帯の海は栄養が少ない。だから、植物プランクトンも多くはないし、コンブやワカメのような海藻も少ない。そのためか、海でも磯臭くはない。そこが沖縄の海のさわやかさの秘訣でもある。栄養分の少ないサラサラの白砂で戯れる水着の女性は絵になるが、コンブを巻きつけた女性はやはり絵にならない。南の海のポイントは栄養が少ないことである。これが透明度の高い海を維持している。



北の海に生息するクロソイ。おいしい魚だが、その色・模様にはまったく無頓着だ。視覚の利かない植物プランクトンの多い海で進化したからだろう。須磨海浜水族園提供



透明度が高くなると、魚は視覚で情報を交わすようになる。同じ種であることを認識するために、雄雌の区別のために、発情していることを確認するために、あらゆる局面で視覚が使われるのである。認識や区別のためには、当然、分かりやすい色や模様がよい。そのような背景から、あの熱帯魚の美しい色彩は進化してきたのである。一回は9月22日

熱帯に生息するウミツキチョウウオ。体の模様は海から出た月をイメージさせる。視覚を重視する生物だから、この色・模様が進化したのである。須磨海浜水族園提供

亀崎直樹(かめざき・なおき) 1956年生まれ。神戸市立須磨海浜水族園園長。東京大学大学院農学生命科学研究科客員准教授、NPO法人日本ウミガメ協議会会長を兼務。専門はウミガメを中心とした海洋生物学。